

桜美林大学のフィールド教育：「サービス・ラーニング」

基盤教育院	フィールド教育デパートメント長	足立 匡行
基盤教育院	サービス・ラーニング・センター長	牧田 東一
基盤教育院	サービス・ラーニング・センター	林 加奈子
	リベラルアーツ学群4年生	渡邊エミリ
基盤教育院	サービス・ラーニング・センター	向井 一朗

キーワード：サービス・ラーニング、フィールド教育、学事而人、震災ボランティア、社会正義、社会貢献

1. はじめに「桜美林大学のフィールド教育：サービス・ラーニング」

足立 匡行

桜美林大学におけるフィールド教育は「キリスト教主義に基づく豊かな教養をもった国際人の育成」という建学精神を具現化する役割の一端を担う重要な教育領域である。学生たちはフィールド教育を通して教室や図書館という閉じた空間から飛び出し「世界を教室」として学ぶことで、大学での学習を実践の場で応用する機会を得る。この学外での学びは、本学の「学事而人（がくじじじん＝学びて人に仕える）」の教育方針とも密接に関連している。

基盤教育院では、世界で活躍できる人材育成教育を更に進めるため、2011年4月、フィールド教育デパートメントの一部としてサービス・ラーニング・センター（以下 SLC）を設立した。SLCは、①本学における「サービス・ラーニング教育」の充実と、②大学内の異なる部署で行われている「ボランティア活動の情報をまとめ、わかりやすい形で学生たちに提供すること」を主な目的としている。

ここで注意が必要なのは、フィールド教育デパートメントでは、「ボランティア」と「サービス・ラーニング」を全く異なる概念として捉えていることである。前者は「自発的な個人の意思に基づき、自らの時間や技能を無償で社会に提供すること」と定義できるだろう。一方の后者は、「大学で学んだ知識を実社会で活用し、その体験を自らの学びに繋げるための教育プログラム」ということになる。つまり「サービス・ラーニング」は、通常のボランティアとは全く異なる「教育プログラム」を意味しているのだ。

当初、SLC は、2011 年度 4 月に準備室を開設し、2012 年度より始動開始予定であった。しかし 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災により、この計画は変更を余儀なくされた。地震直後、被災地に向けてどのようなサポートができるのかを見極めるため、まず桜美林大学では嶋田律之講師、向井一朗講師、米田和希子助手を現地に送り情報の把握を試みた。その報告に基づき、SLC 長の牧田東一教授、林加奈子非常勤講師が中心となり、宗務部、学生部、その他の学内部署からも協力を得ながら、学生、教職員を被災地に送り出している。現時点までの主な活動は、日本基督教団東北教区被災者支援センター「エマオ」と「気仙沼プロジェクト」（大学間連携によるボランティア活動プロジェクト）での支援活動である。また現地に赴くということだけではなく、活動後の報告会や学内での公開シンポジウムなど活発な活動を続けている。

今後、フィールド教育デパートメントでは新たなサービス・ラーニング科目を提供することで、ひとりでも多くの学生が「学事而人」を実践していく機会を増やしていくことになる。本学でのサービス・ラーニング教育は、学生にとっても社会にとっても有益なプログラムとなるはずだ。

2. 東日本大震災支援活動への学生参加支援と参加学生の意識変化に見る今後の課題

牧田 東一・林 加奈子

SLC では、東日本大震災発生後、前述の「エマオ」と「気仙沼プロジェクト」、そして「仙台七夕祭り」への学生及び教職員の参加支援を行ってきた。特に、これらの学生に対し、出発前にオリエンテーションとして現地の被災状況や現地で注意すべきこと等について伝え、参加学生を心理的にサポートしてきた。12 月上旬現在で、SLC を通して宮城県仙台市、石巻市、気仙沼市の被災地に赴き、震災支援活動に参加した学生及び教職員の数は 90 名に達している。中には、1 人で数度にわたり支援活動に参加している者や団体のスタッフとして活躍する者も出ている。

参加を希望する学生は、報告会などで話を聞いて「助けを必要としている人がまだいる。短い期間でも役に立ちたい。」「元々ボランティアに興味があった。」「自分の目で現地の様子を確かめ、自分なりに考えたい。」「人と関わることで自分も成長できるようなことをしたい。」という思いを持ち、SLC を訪ねてくる。そして、実際に参加してみて、彼らは現地で様々な感じ、学びを深めてきている。しかし、今回の参加支援は、準備期間も限られていたことからサービス・ラーニング（「大学で学んだ知識を実社会で活用し、その体験

を自らの学びに繋げる」という趣旨ではなく、純粹なる学生ボランティアの参加支援ということで行ってきた。そこで、来年度から本格的にサービス・ラーニングを展開していく上で、今回の支援活動に参加した学生は何を感じ、何を考えてきたのかを知る必要性を認め、秋学期に入ってからこれまでに支援活動に参加してきた学生に対し、アンケートとフォーカス・グループ・ディスカッション（以下、FGD）を行った。アンケートには26名の学生が、FGDには学年の異なる女性5名、男性2名が協力した。以下、この調査結果から、参加学生の意識変化について、特徴的だった下記5点について簡潔に述べたい。

(1) 大震災と復興に対する意識変化

学生は、実際に被災地に赴き、支援活動に参加したことで、震災を「より身近なもの」と捉えるようになった。(26人中14人)」「自分の問題としても捉えるようになった。(26人中6人)」「人生のある程度の時間をかけて取り組んでもいいほどの大きな問題だと感じるようになった。(26人中6人)」と回答している。FGDでは、実際に被災地に赴き被災の状況を目の当たりにしたことや、またそこで被災のために大学に行けない自分と同年齢の人々や家族を失った人々に接したことで、震災は自分にも起こりうることでありと認識するようになったと述べている。

(2) 社会問題に対する関心の変化

震災支援活動への参加を経て、半数以上の学生は社会問題に対し「関心が高くなった。(26人中16人)」と答えている。FGDで具体的にどのような社会問題への関心が高くなったかを尋ねたが、「メディア報道のあり方」「電気や原発などのエネルギー」といった震災をめぐる社会問題から、「母子家庭の問題」「コミュニティ問題」「独居老人などの孤独の問題」といった具体的な問題、さらには「環境（自然）問題」、「環境と人間との関係」、「社会の在り方/システム」といった問題まで幅広い回答が返ってきた。

(3) 社会改革の必要性と可能性についての意識変化

社会改革の必要性について、「以前より社会改革は必要だと考えるようになった(26人中19人)」という回答が多数を占めた。しかし、改革の可能性について尋ねると「以前より社会改革は困難だと思うようになった。」という回答が26名中12名を占め、最も多数の結果であった。

FGDでなぜ困難だと思うのかについて尋ねると、「人間が動かしているはずなのに、そうとは思えない社会のシステム」「社会の上に立つ人々が自分たちとは違う種類の間人」「リーダーシップの不在、政治であれば首相」といった回答や、「ボランティアはやりたい人だけがやればいいという社会の風潮」「震災の風化や節電意識の希薄化」「人助けをしたら自分の生活が成り立たないという競争社会」、また「(自分自身)どこまで自己犠牲出来るか正直難しい。」「一人一人の変革が社会変革につながると思うが、自分自身が変わることも大変だと思うから、その先にある社会変革はもっと難しいと思う。」といった声が

聞かれた。

(4) ボランティア観の変化

ボランティア観の変化については、ほとんどの学生が「ボランティアは、やりたい人や意識の高い人々がやるべきことだと思っていたが、誰にでもできる自然なことだと思うようになった。(26名中20名)」と回答している。

(5) 大学での授業への関心の変化

上記(1)～(4)の回答からは、震災支援活動に参加した多くの学生が、実際に参加したことによって震災をより身近に、また自分の問題として感じるようになったことや社会問題や社会改革についても考え始めるようになったことが読み取れる。そして、ボランティアとして自分自身が社会に関わることは、難しいことではなく自然なことだと思うようになったということも彼らの意識変化として読み取ることができる。

しかしながら、社会に対しての視野が広がったにも関わらず、驚いたことに「大学での授業への関心の変化」については、「特に変化はない。(26名中19名)」「特に考えたことはない。(26名中5名)」という回答をしている。これがどのような意味なのかについてFGDで聞いてみたところ、「フィールドで学べることの方が大きいと思ってしまった。大学の授業は関係ないと思ってしまう。」「現地は非日常。僕らの求めるものは現地にしかないと思ってしまう。授業はやりたいことと違う。」「現地に戻りたい。授業で震災を取り上げているもの、関係のあるものが少ない。」「どんな内容の授業であっても、先生は震災のことに少しは触れてもいいのではないか。何にも触れない先生は、震災に関心がないんだと思ってしまう。」というものであった。この回答には、正直耳が痛かった。しかし、今後本格的にサービス・ラーニングを進めていく上で、これらの学生の声は非常に貴重である。「大学での学び」と「体験における学び」をいかに結びつけるか、「大学での学び」と「実社会」をいかにつないでいくかはサービス・ラーニングの課題であり、目的そのものである。SLCとしては、机上の空論に陥らぬよう学生や現場の声に耳を傾け、桜美林独自のサービス・ラーニングを築いていきたいと考えている。

3. 学生震災ボランティアの活動日誌から

以下に、学生震災ボランティアに参加した、リベラルアーツ学群4年 渡邊エミリさんの活動日誌を掲載する。渡邊さんは、現在、SLCを支えるSLC-V(SLCボランティア)として、震災活動報告会や自主勉強会の企画・運営をはじめとする活動に積極的に参加している。

災害ボランティア活動日誌 ～「ありがとう」のバトン～

リベラルアーツ学群4年 渡邊 エミリ

2011年3月11日、この日のことは鮮明に覚えている。私が住む地域では、地震直後停電した。もちろんテレビも見ることができず、携帯の充電もほとんどなかったため、情報が入って来なかった。停電は夜中の0時頃まで続き、次の朝テレビをつけた時には、ものすごい衝撃であった。東北の沿岸部が津波で何もなくなってしまった映像が、何度も何度もテレビで流れたのは記憶に新しいだろう。テレビでは出ないようなリアルな写真がインターネットでたくさん公開され、現状を知っては涙を流すことしかできない日々が続いた。「何かしたい！でも私が現地に行っても、何の役にも立たないだろう。」そう思い、現地に行くことを断念した。震災直後は、募金することが私にできる精いっぱい支援であった。

1か月遅れて大学が始まり、東京に居ながら何かお手伝いできることはないかとゼミの牧田東一先生に相談したところ、できたばかりだというSLCを紹介して頂いた。この時期から既に私の周りでは震災が風化し始めており、「過去のことにしてはいけない。」「風化させてはいけない。」という熱い思いの学生が9名集まった。この9名で、「せめて自分たちの周りでは震災を風化させたくない。」という思いから、講演会や勉強会を企画、実施するようになった。この3.11震災はどんな形であれ、きっとそれぞれに影響を与え、何かしらの転換期になったのではないかと思う。私自身も震災によって、考え方や生き方に影響を受けたひとりであった。

日に日に、直接現地に行き復興のお手伝いをしたいと思う気持ちが強くなった。しかし部外者の私が行っても迷惑になるだけじゃないのか、邪魔になるだけなのではないだろうか、そんな葛藤が自分の中にあった。だが、まずは行って見ないことには始まらない、そう思い7月17日から24日までの1週間、仙台にある日本基督教団東北教区被災者支援センター（エマオ）でボランティアをさせて頂いた。

私は、エマオから自転車で1時間のところにある若林区（七郷）でワークをさせて頂いた。ワーク先に近づくにつれ道がボコボコしていき、人影が少なくなっていった。高架下を抜けると、そこには別世界が広がっていた。真ん中に綺麗に清掃された道路が走り、その左右の畑にはとても長く伸びた草の陰に、瓦礫の山がたくさん積まれていた。私が行った頃には草が瓦礫を覆い隠すくらいの高さまで伸びていたので、正直、不思議な世界に見えてしまった。まさか一度の津波でその姿になってしまったと信じられず、何年も放置された廃墟かのように見えてしまった。一番驚いたのは、4月に同じ場所に行った友人の写真で見たピアノが同じ姿で残っていたこと。そこから2ヶ月半経った頃

であるのに、草だけ伸びている状況を見ると、復旧・復興は本当に時間のかかる作業なのだ実感した。

私がワークさせていただいたのは N さんのお宅で、庭の草刈りを行った。一日目とはとにかく淡々と草で埋め尽くされた庭を綺麗にしていた。二日目も同じ作業を繰り返していると、私の中に疑問が生まれた。「生活するのに影響しないはずの庭の手入れを、何故何日もかけて行う必要があるのだろうか。」家が丸ごと流されてしまった家、もう住めなくなってしまった家がある中、庭の手入れをする意味を求めてしまったのである。そんなことを頭に浮かべている中、お宅の方に「津波で海水が流れ込んできたせいで、庭の植木は枯れ、普段なら生えない雑草が一面を埋め尽くしている。」と寂しい顔を浮かべてお話頂いた。そこで私はハッとしました。私は最低限の生活が出来ることにばかり目を向けていた。しかし、本来あるべき生活の姿は違うはずだ。雑草の生えていない綺麗な庭があり、潮の混じった土ではない。海にあるはずの貝ももちろん庭にあるはずがない。その通常でない状態の自分の家を見て、自分であったらどう感じるのだろうか。元の家の姿に近づくことで、初めて普段の生活に戻って行くのではないのか。

被災地に広がる瓦礫の山は、片づければ無くなる。しかし、人の心の中にある傷は外からは見えない。住む家が無事であったとしても、綺麗な状態に戻ったとしても、心の傷というものは癒えるのに時間がかかるだろう。しかしその第一歩は、できる限り元の姿に戻して行くことなのではないか。私は津波の被害も受けてはいないし、被災者の方と同じ思いをすることはできない。だが、同じ「復興」という目的を持って作業をしているのには違いない。そういった意味では「パートナー」であり、できる限り「パートナー」と同じ気持ちで作業をしたいと考えてようになっていった。

草刈りの他にもお宅の中の拭き掃除や、泥運びなどの作業を行った。全体を見ると、ごく一部のお手伝いしかできていないのにも関わらず、被災地や仙台の人に会う度、とても感謝された。想いのこもった「ありがとう。」が毎日交わされた。「東京からボランティアに来てくれて“ありがとう”。」「部外者である私を温かく受け入れてくれて“ありがとう”。」…。

一つの畑の草刈りをするだけでも、4人で2日程かかる。側溝の泥出しはそれ以上に思うように進まない。このペースで作業を行ってはいは、復旧・復興には何年もかかるに違いない。私は1週間という短い期間しかいることが出来なかったが、被災者の方々は3月の震災からずっと被災者であり、復旧・復興のために時間を費やしている。それなのに「ありがとう。」という言葉を受取るのはとても心苦しかった。

私は7月半ばと9月半ばにも1週間エマオに行った。きっとまた行くだろう。しかし私が「日常」を過ごしている間にも復興は続いている。その間も全国から誰かがボラン

ティアに行っているだろうし、「ありがとう。」のやり取りが続いているだろう。その誰かが「日常」に戻ると、また別の誰かが行くだろう。そうしてバトンは廻っていく。そのバトンは、誰かが行くだろうと復興への目的を放棄するとき、またはバトンを渡す必要性がなくなったときに終わる。私は後者になればいいなと思っている。「復興」というゴールを達成し、バトンの必要性がなくなれば、財産としてきっと心に残ることだろう。

もちろん支援の方法は人それぞれであり、様々な方法がある。しかし、震災は終わっていない。まだまだ復旧・復興には時間がかかることを忘れないで欲しい。

私たちが出来ることはほんのわずかではあるが、決して無力ではない。「パートナー」と共にゴールを目指し、バトンを受け取り、受け渡して行きたい。

4. 今後のサービス・ラーニング・センターの活動

向井 一朗

桜美林大学においては、サービス・ラーニングの目的を「社会正義の実現」と位置づけ、大学による社会貢献の一部とする。2012年度からは、基盤教育院フィールドスタディーズ「地域社会参加」科目として、新たなサービス・ラーニング科目の立ち上げを企画し、学内調整とともに科目内容の検討を行ってきた。

この結果、2012年度より、15コマ程度の講義と20～30時間のボランティア活動を組み合わせた学習プログラムとして、「地域社会参加（災害支援とボランティア）」、「地域社会参加（私たちに身近な貧困）」、「地域社会参加（地域に根ざした福祉）」、「地域社会参加（地球に優しい農業）」の4科目が新設される予定である。

たとえば、「地域社会参加（地域に根ざした福祉）」は、かながわ福祉クラブ生協と、生協につながる「ワーカーズ・コレクティブ」団体の提供するサービスから、学生が学びを得る企画である。地域社会には、障がいや病気による体調の不全などさまざまな理由から、自分の本来持つ能力を十分に発揮する機会を奪われた、「弱められた」立場にいる人々がたくさん暮らしている。学生たちは、このような人たちに対し、専門的な技術を持たなくてもできるような相互扶助をベースとした地域での福祉活動を体験する。この体験を通じ、学生が、身近にいる「弱められた」人々の存在に気付き、その痛みを耳を傾け、自ら取り組むことのできる社会貢献を考える力を身につけることを目的としている。

また、桜美林大学のサービス・ラーニングは、SLCのみで実施するものではなく、教授法としてのサービス・ラーニングが、全学を挙げて導入されることを目指す。このため、SLCでは、全学の教員がそれぞれの担当する科目でサービス・ラーニングを導入するた

めの情報センター、推進・サポートセンターの役割も担っていく。

【参考文献】

足立匡行 (2011). 「桜美林大学のフィールド教育—学而事人の教育実践—」『OBIRIN TODAY』第 11 号 pp.7-13.

牧田東一・林加奈子 (近刊) 「震災ボランティアによる参加学生の意識変化—アンケートとインタビューを通してみる学生の体験とその影響」『東日本大震災—知の責任と役割—』(仮題) 勁草書房